

高齢者音楽療法への提言

財津 幹三郎

私は一般大衆を対象に演奏活動を始めて50年、高齢者音楽療法を始めて15年を過ぎた。始めは手探りでいろんな参考書を読みながら演奏をして来たが、続ける内に段々と違和感が増大して来た。この違和感の原因を考える為に、データをとり考察をした結果がセラピストの参考になればと出稿する次第である。

音楽療法を始めるにあたり施設の責任者から良く聞く質問は、「入所（入院者）の状態が良くなるのか？」である。私は薬剤師でもあるので逆に「薬で根本的に治るのは幾つあるのか？」と聞きたい。どんな生物にも終焉があるように、植物人間に近い患者にも何か有効な手があるものだろうか。また治療に近い行為は医師の領域になる。セラピストの仕事にも限界があるし、その中で何が対象者の為に成るかを優先すれば、答えは見つかるはずである。ここでは理想論や宗教的願望は述べない。先ず対象者が何を音楽として快適に感じるかの生態を知ろうではないか。

音楽とは

在来の音楽療法では始めから名曲ありきでスタートしている。そして脳に α 波が生じリラックス出来るといわれているが、もともと発信する音楽情報を受信者が認識したときに出来る場が音楽の筈で、それが無ければ音である。この相手の認識が判らないまゝに演奏者が自らの信じる曲を演奏しても、対象者は音としか認識出来ず3分間以上は我慢できなくなる。

名曲を聴けば…と言われていているのに、何故か歌を唄うことに終わっている。世の中には唄う習慣を持っていない人も沢山いるし、音楽を聴くのが大好きと云う人も沢山いるのに何故か無視されている。

曲の選定では高齢者は小学唱歌・童謡・民謡・軍歌が好きだと思われているが、なにを根拠にしているかを誰も考えて見た事も無い。ここで述べる音楽とは、メロディー・ハーモニー・リズムの三要素のあるもので構成されたものについて考察している。

音楽の認識

音楽とは人類がせいぜい500年かけて育てた文化であり、人間のDNAには無い。人間に生まれて育つ環境の中で、対応する頭脳が育つもので音楽の環境の無いところでは育たない。参加者には音楽に対応する脳が育っていない人や、脳機能障害で失われた人もいる。現在の我々日本人が音楽と認識している西洋音楽が日本に導入されたのは、今から百四十年前の明治政府になってからである。西洋文化に追いつき追い越せの発想から先ず教育、その為に小学校から歌を唄わせることにした。(明治14年小学唱歌令…当分これを欠く)とある。この当分これを欠くとは教える先生がいないからで、その為学生をヨーロッパに研修の為派遣し、帰ってから上野音楽学校(現在の学芸大学)を開設し、音楽教師の養成を始めた。つまり日本の音楽は教育音楽からのスタートである。

ヨーロッパでは一般大衆とキリスト教会から進化して来たのに、日本では教育から始まった経緯の違いがある。これが違和感の原因の一つであった。つまり教育音楽では個人の好みは関係なく、文部科学省が決めた名曲といわれている曲を教えれば良いのである。当然器楽の演奏が出来る人は少ないので歌から始まるはずで、最初の頭脳への音楽の摺り込みは歌で、接点は歌詞でしかない。

音の長さ、高低で認識する環境はないし、勿論和音の概念は無い。つまり歌詞に音の高低をつけて読むことから始まる。そして教育音楽の終点は学芸会である。学芸会には親や親戚・知人など動員して来てくれるが、プロの演奏会は有料である。それなりの音楽の表現力を発揮しなければ二度目はないし、拍手をいくら沢山頂いてもご飯は食べられない。人の前で演奏出来るまでの練習期間は無収入なのである。

地域によってはお昼や3時、5時とミュージックサイレンを鳴らしている役所が有るが、対象者は音楽としての認識ではなく信号である。試みに周辺の人に曲名を聴いても答えは殆ど0である。

問題は、子供から大人の頭脳に発達する時期の社会環境からの音楽情報入力の質と量なのであり、音楽に対応する脳細胞の育ち方である。学校以外の音楽情報は、大正末期の映画から、レコード、ラジオ、テレビの順で広がってきた。その時育った場所と環境で大きな差が出来る。農村育ちと町場育ちでは音楽情報量に大きな差がある。従って全ての人々が共通の感情を動かしてくれる曲は無い。セラピーでは個人個人が音楽と認識している具体的な曲をリクエストで求

めるしかありえないが、残念ながら曲の題名を覚えている方は僅少である。

そこで登場するのが、高齢者が認識する曲は、小学唱歌・童謡・民謡・軍歌だろうとの発想としか考えられない。然し小学校卒業の十二才までに覚えさせられた曲を、介護の適齢期まで好みの曲として引きずるものであろうかと？誰も疑問を感じていない。

好みの音楽が伝わる社会基盤

童謡は地のわらべ歌と違い大正7年から東京で始まった新しい運動なので、残念ながら全国区に広がる社会基盤はまだ育っていない。民謡では北海道の「ソーラン節」が当時の社会基盤では鹿児島に届く事はあり得ない。軍歌では「戦友」は小学唱歌であり、軍隊では反戦歌として禁止されていた。ただし高齢者が思い込んでいるのに逆らう必要は無いし、「同期の桜」は海軍の歌であり陸軍は唄っていない、これも逆らう必要は無い。

音楽療法では肉体的作動を伴わないので（今では音楽運動療法に分類されている）曲を聞いて感情が動くことがメインになる。ハンドベルやタンバリンを使いながら唄う事は幼児教育そのものではないのか。そもそも高齢者の大多数は幼稚園に行っていない。その為には高齢者の文化を知ろうとする感性と、少しの努力が必要である。元々高齢者には生活環境を変えることや、現代の感覚で接する事はストレスになることは知っている筈なのに、セラピストは自分の知っている曲や弾ける曲を中心に進行している。それこそ教育音楽の感覚である。

知らない曲で面白くも無いものを覚えさせられる訳で、覚えさせられた曲は、その部屋を出たらもう忘れている。そして残存機能のある人ほど子供扱いだと反発して参加しなくなる。何故なら対象者が何を音楽と認識しているかが抜けているからである。それに小学唱歌にしか反応を示さない方を中心に進行すると、やがてネタ切れになりマンネリになるのは当然である。そして一番対象とすべき残存機能の有る方は参加しなくなる。その認識が確定出来れば劇的に変化が起きる。

桃の節句だから「うれしいひな祭り」を大きな声で唄いましょうと、殆どの施設でやっているが、曲が出来たのは昭和十一年。小さい時に唄っていない。「めだかの学校」は昭和26年のラジオ歌謡であるし「たなぼたさま」は昭和16年の発表曲である。五月だから五月の唄を唄いましょうと言うセラピストや介護の人が殆どであるが、同じ小学唱歌でも「鯉のぼり」は大正二年と昭和六年「背くらべ」は大正八年の文部省制定である。どれが良いか対象者に聞いた事があるだろうか？

始めに述べた違和感の違いの一つは教育音楽的思考と、対象者が認識する音楽との乖離であると考えられる。対象者が認識出来なければ音楽は音になる。この曲はあなたの為に良い曲であると信じて演奏しても、相手が認識できなければ単なる音の連続で段々煩くなっていく。「大きな声で唄いましょう」と殆どのケアワーカーが言う。対象者が長い人生の中で唄う習慣があったのかを考えてもいない。自分たちはカラオケでマイクを持って唄うのが当たり前と思っているだろうが、それが文化の違いである。

少ない持ち歌を毎回繰り返せば必ずマンネリになる。そして残存機能のある方は来なくなる。対象者が曲を認識出来て感情が動けばそれが音楽療法になる。唄う習慣を持たない人に大きな声で唄わせるのを結果と思っているなら、それこそ教育音楽的思考であり、音楽療法としては疑問である。

音楽療法のセラピストについて

先日の医学会発表で高齢者がよく罹る肺炎は菌によるものだけでなく、誤嚥によるものが多いとの説が出た。院内感染が言われた頃のやかましく消毒を指導されたのは何だったのであろうか？逆に自分たちが習ったセラピーは何時頃の根拠を元に誰が指導したのかは、誰も問題にしていない。

音楽療法では高齢者には小学唱歌・童謡・民謡・軍歌が好きだという思い込みは誰が指導したのであろうか。大きな声で唄うのはあなたの肺筋や声帯筋肉の訓練になると強制していなかったか。

音楽と受容体の関連について

今まで高齢者は子供に返る、の理論がまかり通っていた。肉体的にはそうかもしれないが頭脳はどうであろうか。最近では14・5歳位から20歳前後の間に大人の頭脳に発達し永久記憶になるとの説がある。参加者からのリクエストを整理しても大体合っている。但し本人が育つ生活環境と個人差によって大きく差があるので、年齢による輪切り思考では答えは出ない。

入所者・デイケアで唄う習慣を持っている人は、一割もないのを自分の目で確かめていただろうか。唄う習慣を持っていないが聴くのは好きといわれる高齢者はかなりいるし、その方々がどのジャンルに反応があったかを見ていただろうか。指導に熱心な人ほど相手を見ていない。生活習慣の無いことを強制すればそれはストレスを与えているだけである。長い人生を夫々の思いで暮らした方々を、年齢の輪切りでこちらの都合で勝手にテーマを決めてセラピーですとはありえない。

高齢者が子供の頃、親は明治生まれで音楽といえば学校唱歌しかなかった時代大正初期から現代の流行歌のはしりが始まっているが、ほんの大都市だけであり、民謡はあってもローカルなものに過ぎない。全国的な広がりは大正末期まで待たねばならない。だから流行りの歌を子供が歌うと「俗歌を子供が唄うものではない」と叱られ、ある程度年をとってからは「歌ばかり唄って仕事をせずに遊んでいる」と怒られたものであり高齢者が大きな声で歌ってくれない原因の一つである。また農村部では好きな唄に遭遇してノット時には、同席の人から後で「慎みの無い」と白い目でみられたとのことである。確かに音楽の受容体の育っていない人には、その親の教育から考えてそうであろう。

音楽のなかの歌について

メロディーについて幾多の事例がある

音楽の店を経営していた頃の話である。当時NHK素人のど自慢のローカル番の伴奏をしていたので、番組の始まる一週間前から出場者が練習に来ていた。その中に「先生唄い始めにハイとサインを下さい」と言う人が居て意味が当時は分らなかった。つまり自分が好きで唄う歌だから前奏位は分っているだろうはこちらの思いで、本人は前奏は全く認識出来ていなかったのである。結局歌

詞に音程の高低と長さの長短で唄えば、それが当人にとっての音楽なのである。

最近のリクエストで「暴れん坊将軍」が出てきた。テーマの曲はあるが出版物には無い。そこでTVから曲を採り、次回のセラピーで弾いたが何の反応も無い。多分北島三郎の挿入歌のどれかをテーマ曲と思ってリクエストしたのだろうが、あれほど繰り返し出てくるテーマ曲は歌無しなので認識出来ていない可能性がある。

また、森進一の「襟裳岬」が流行っていた頃、県庁の高官の方から「僕の子供がギターの弾き語りで歌っているのを聴いて良い曲だから弾いて」のリクエストが来た。三、四曲先行のリクエストを済ませて「襟裳岬」を弾いている最中に当人から「僕のリクエストはまだか」と催促された。歌なしでは曲の認識が出来ない代表的なエピソードである。

特に歌は音楽の一部分であることを認識していないのではないだろうか。

歌詞で曲を認識する構図が判ると盗作が認識出来ない理由が読めてくる。先だつての上海万博のテーマソングが日本の唄の盗作であると話題になっていたが、昭和30年以降の日本の唄にどれだけオリジナルな曲があったであろうか？特にサン・レモ音楽祭以降はひどかった所以他国のことは笑えない。メロディーの末端の枝振りを少し変えても、歌詞を読む事に意識が集中すればモチーフは聞こえないし、むしろ以前聴いたことの有るメロディーの方が覚えやすいし、流行りを認識する方が一般庶民には重要なのである。

TVでアナウンサーが新曲を紹介する時に、「この曲は聞いていて涙が出る程素晴らしい。特に詩が良い…」のセリフは聞くが、メロディーが良いとは聴いた事が無い。唄う人は歌詞を読んでいるので似たメロディーがあっても関係無いのだ。これが盗作の認識の違いであろう。つまり歌詞が違えば別の曲の認識なのである。

今の携帯電話、スマートホンの時代と違い昔は（そんなに昔ではない）モース信号で通信していた。トン・ツーで専門家は訓練されていたが、素人さんには符号をつけて覚えさせられたものである。

イ＝トン・ツー (伊藤)
ロ＝トン・ツー・トン・ツー (路上歩行)

ハ＝ツー・トン・トン・トン (ハーモニカ)
ニ＝ツー・トン・ツー・トン (入費超過)
ホ＝ツー・トン・トン・ (報告)
ヘ＝トン・ (屁)
ト＝トン・トン・ツー・トン・トン (特等席)

これは頭の中でトン・ツー・と日本語への変換でトン・ツーで覚えた人より時間差が生じるがなんとか間に合う。この際トン・ツー・の(伊藤)は「イ」への触媒である。メロディーは認識出来なくても歌詞の触媒があれば認識出来る。

もう一つの例では脳血管出血の患者さんで言語障害を受けた方が、字を読んでも何を言っているか判らなかったが、節(メロディー)を付けたらすらすら出て来たのに驚かされたことがある。これは前記の逆でメロディーが触媒になっていた。

契約している病院や介護の施設では例外無くBGMを流している。ケアワーカーや作業療法士と話しをしている時「いゝ曲を流している」と言うと殆どの方は聴こえていない。いや音楽は聴こえているのだが何の曲であるかが認識出来ないから、曲でなくて音の範疇に入るのである。これは高齢者だけの問題では無い事を意味する。

また、TVである代議士の激励会の様子が放映されていた。問題はそこで全員で唄われていた「星影のワルツ」の替え歌にある。ワルツは当然3/4であるが、全員の手拍子は2/4であった。音楽の3要素のリズムが抜けている。これをリズム音痴と言う。

今までのデータを集約してみると、大多数は歌詞で曲の認識をしている。器楽でメロディーを聴いて何の曲と認識出来る人は平均0、03%しかいない。

そこで対象者の好む音楽とは何かを探る為に基準を考えて見た。

それは人間の頭脳は十四、五才頃から二十才頃に大人の頭脳に発達しその間の記憶が永久記憶であるとの学説を元にして、対象者の入力可能な音楽情報のリストを年代順に作成した。それと作業の始めからリクエストを分類して対象者の好む音楽のジャンルを仕分けしてみた。

その結果教育的思考で始まった音楽とは唄であり、明治政府の文部省制定の唱歌である。ただしこのクラスはこれしか頭に浮かんでこない（他は知らない）。

一番多いのはその時代の流行であり次が歌手別である。たとえば大正十年生まれの人は昭和十年前後から永久記憶の分野に入る、但し昔は作品が少なかったが、曲の寿命が長かったので昭和四、五年から記憶する可能性が有る。そして認識に残る流行情報の発信源は映画であり映画主題歌であった。

無声映画の主題歌の代表は大正七年の「金色夜叉」、大正十年の「船頭小唄」、大正十四年の「籠の鳥」であり、大正十五年にアメリカでオールトーキーが発明され、日本に上陸して飛躍的に増えたのが昭和四年の「東京行進曲」、昭和六年の「丘を越えて」、昭和八年の「東京音頭」...

もう気が付かれたであろうが、これで音楽に関する頭脳を受容体が育つてくると、次は歌手別である。例えば藤山一郎をアイドルにした人は「丘を越えて」から「酒は涙か溜息か」「影を慕いて」「男の純情」「東京ラブソディー」「長崎の鐘」と続く。

東海林太郎であれば「赤城の子守唄」「国境の町」「旅笠道中」「野崎小唄」。昭和の初期には女性歌手がすくないのは、良家の次子女がそんな仕事をするものではないとの社会的偏見があり、芸者がレコード会社から口説かれたものである。

藤本二三吉の昭和四年「浪花小唄」「祇園小唄」、小唄勝太郎の昭和八年「島の娘」「東京音頭」昭和八年「さくら音頭」、赤坂小梅の昭和八年「ほんとにそうなら」、新橋喜代三の昭和十年「明治一代女」、音丸の昭和十一年「下田夜曲」「博多夜船」、昭和十二年を過ぎてやっと普通の女性が参加するようになった経緯がある。

音楽情報の流れで判り易い現象がある。淡谷のり子の「別れのブルース」である。高齢者のリクエストの少ない曲であるが、理由は戦時下でドレスはいけない、モンペでステージに立てと官憲から指導を受けたのに逆らい、ドレスで唄った為ホサれていた。ところが戦地への慰問団では兵隊さんにドレスが受けて、「別れのブルース」が内地に逆輸入して来た流れがあった。官憲サイドで考えるのと、一般大衆サイドの好みでは大きく違う良い例である。

音楽を認識する頭脳が育っているのか？対象者が何を音楽と認識しているか？が今まで何も論じられてこなかったのが不思議でならない。

オーケストラのメンバーで弾いていた時の話。ブラームスの曲でフレーズから見てポルタメントを付けたほうが良いと思い弾いたら、パートリーダーから「流行歌ではないんだから…」と怒られた。学生時代からオーケストラ一筋に頑張ってきたのはわかるが、クラシック以外は知らないくせに、違ったジャンルは差別してみしていないか。教育音楽で育った良い子の代表思考である。ちなみに、後日中央から指導に来た指揮者はポルタメントを付ける様指示した。

ブラスバンドの指導を依頼された時の話。簡単な練習曲にとワルツを編曲しパート譜を渡し、演奏を始めた直後指揮棒が止った。「ブー・パー・パー」「ブー・パー・パー」とやられたからである。管楽器の奏者は音符の長さをキッチリ伸ばす訓練を受けている。奏者にとっては「ブー・パー・パー」は正解なのである。但しリズムの感覚では「ブン・パン・パン」でないとワルツにならない。

小さい時から正規の？音楽教育を受けた人の中にはクラシック至上主義の考えを持っている人がおり、特にモーツァルトが音楽療法には最適と信じている人が多いけれど、モーツァルトとベートーベン以降のピアノが違うことを知っている人の少ないのも驚きであった。音楽教育を受けた人がその程度だから、対象者が何を音楽と認識して聴いているか調べる必要も無いし、具体的に何を音楽と認識しているかが判らないのも当然かも知れない。

病院での話。音楽療法の現場に来た院長が後で作業療法士を呼び出して「何ともしれん流行歌ばかりやっているが、あれで音楽療法なのか」と言われたそうである。それまでに作業療法士にはしっかり説明した筈なのに、院長に説明出来なかったそうである。何故「患者さんのリクエストばかりです」「患者さんの好みにケチをつけるのですか」と答えられなかったのか。勿論上司の思考に反論するのは難しいとは思うが。

そこで庶民の耳に届く音楽（特に歌謡曲を中心に）を年代順に並べ、それに付随する通信社会基盤との関連の表を作成した。前記のレコード、映画、ラジオ、テレビの順で流行ってきた事は確認出来た。

特に高齢者は民謡が好きだと思われてきたのは、ローカルな曲だけで、全国区の曲は昭和30年以降テレビが普及した以降、三橋美智也・三波春夫・村田英雄の三人が民謡キャンペーンを張った結果であることも判明した。そして「皆で唄いましょう」といわれるが、踊り手は多いのに歌い手は少ないことを知らない。それを好きだと思い込んで「唄え」を強制する。「鹿児島小原節」を考えても歌い手は一人、あとは踊り手である。

軍歌が好きだと思われていることも、軍隊の中で唄わされた歌と、内地で戦意高揚の為に唄わされた歌がごっちゃに考えられていた事も判明した。当時の通信状況から当然で、戦地と内地では伝わらない。

団塊の世代が少しずつ高齢者になってきた現在、フォークで育った耳を持った人が参加する予想は持っていたがその通りになり、1930年のグローバルなポピュラーは登場しないまゝ姿を消している。

歌詞を見せて「この曲に覚えがありますか」と聞いても「知らない」と答える中で、耳もとで唄うと「好きな曲だ」と答える人も多いものである。

これまでに作業療法士やケアワーカーの領域で音楽療法をやってきたが、（患者を良くしよう）と思う人と（良くわからないけれど言われた事をする）に別れる。前者は努力すればするほど医師の領域に触れるし、後者は雰囲気での盛り上げに足を引っ張る（高齢者は日頃認識しないことにはエンジンの掛かりが悪いし認識した頃には終わっている）。

日本で音楽療法が始まって日が浅いので、対象者の生態が判らないまま教育音楽の考えで実施しているのが現状である。

本人が生まれつき頭脳機能が低いのではなく、経年変化や病的変化で低下しているのを忘れて、過去の歴史を無視して上から目線で教育音楽を実施すれば、どんな結果が出るか考えなくても判る筈。

それより対象者のアイデンティティを認めて上げ、本人の輝かしい時代の記憶に同調する（難しく思うだろうが少しだけ歴史を学べば良い）ことで、残存機能の活性化が図れるものである。残念ながら現時点で約30%の方は、音楽の受容体が育っていないか、機能障害のある方には通じない。これらの方には他のセラピーを考えるべきである。

理論はこれくらいにして、対象者の脳の深層に具体的な曲があるかの可能性を述べる。

昭和7年生まれ現在80才と設定してみると、この頃の映画主題歌は寿命が長かったので以下を認識している可能性がある。

主要情報源は映画主題歌とレコード

大正10年「船頭小唄」

大正12年「月の砂漠」

昭和4年「君恋し」(殆どの方は昭和36年のカバー盤)

昭和4年「東京行進曲」

昭和5年「酋長の娘」

昭和6年「丘を越えて」「酒は涙か溜息か」

昭和7年「影を慕いて」

昭和8年「サーカスの唄」「東京音頭」

昭和9年「赤城の子守唄」「国境の町」

昭和10年「船頭可愛や」「旅笠道中」「野崎小唄」「二人は若い」「緑の地平線」
「無情の夢」

昭和11年「あゝそれなのに」「男の純情」「東京ラブソディー」
ラジオ歌謡から「椰子の実」

昭和12年「青い背広で」「裏町人生」「人生の並木路」「妻恋道中」「流転」

昭和13年「支那の夜」「旅姿三人男」「旅の夜風」「満州娘」「麦と兵隊」
「人生劇場」(殆どの方は昭和34年のカバー盤で入力)

昭和14年「大根月夜」「九段の母」「上海の花売娘」「純情二重奏」
「長崎物語」「名月赤城山」

昭和15年「暁に祈る」「月々火水木金々」「湖畔の宿」「蘇州夜曲」
「誰か故郷を想わざる」「新妻鏡」「目ン無い千鳥」

昭和16年「梅と兵隊」「十三夜」

昭和17年「新雪」「南から南から」「南の花嫁さん」「湯島の白梅」

昭和18年「勘太郎月夜唄」「若鷺の歌」

昭和19年「同期の桜」「ラバウル小唄」

昭和20年「ズンドコ節」「ダンチョネ節」
NHK歌謡「里の秋」

主要情報源は映画主題歌とラジオ

昭和21年「かえり船」「東京の花売娘」「リンゴの唄」

昭和22年「啼くな小鳩よ」「星の流れに」「港が見える丘」「夜霧のブルース」

昭和23年「憧れのハワイ航路」「異国の丘」「長崎のザボン売り」
「湯の町エレジー」

昭和24年「青い山脈」「悲しき口笛」「銀座カンカン娘」「長崎の鐘」
ラジオから「夏の思い出」「さくら貝の歌」

昭和25年「あざみの歌」「越後獅子の唄」「水色のワルツ」

昭和26年「高原の駅よさようなら」「上海帰りのリル」

昭和27年「ゲイシャワルツ」「岸壁の母」(殆どの方は昭和47年のカバー盤)

昭和28年「落葉しぐれ」「君の名は」

昭和29年「お富さん」「高原列車は行く」「南国情話」

昭和30年「この世の花」「月がとっても青いから」「りんどう峠」
「別れの一本杉」

主要情報源はテレビ

昭和31年「哀愁列車」「愛ちゃんはお嫁に」「こゝに幸あり」「好きだった」
「東京の人さようなら」「リンゴ村から」「若いお巡りさん」

昭和32年「お月さん今晚は」「柿の木坂の家」「チャンチキおけさ」
「東京だよおっ母さん」「東京のバスガール」「港町十三番地」
「雪の渡り鳥」「喜びも悲しみも幾歳月」

昭和33年「おーい中村君」「花笠道中」「無法松の一生」
「有楽町で逢いましょう」

昭和34年「黄色いさくらんぼ」「古城」「南国土佐を後にして」

昭和35年「アカシヤの雨が止む時」「潮来笠」

昭和36年「上を向いて歩こう」「王将」「君恋し」(昭和2年のカバー曲)

昭和37年「あゝ上野駅」「いつでも夢を」「お座敷小唄」「皆の衆」
「浪曲子守唄」

昭和38年「美しい十代」「高校三年生」「島育ち」「島のブルース」

昭和39年「アンコ椿は恋の花」「東京の灯よいつまでも」「柔」

昭和40年「愛して愛して愛しちゃったのよ」「涙の連絡船」「函館の女」
「まつの木小唄」

昭和41年「女のためいき」「悲しい酒」「君こそわが命」「銀座の恋の物語」
「他人船」「バラが咲いた」「柳ヶ瀬ブルース」

昭和42年「薩摩の女」「ブルー・シャトー」「骨まで愛して」「真赤な太陽」
「夫婦春秋」「夜霧よ今夜もありがとう」

昭和43年「小樽のひとよ」「霧にむせぶ夜」「三百六十五歩のマーチ」
「好きになった人」「銭形平次」「長崎は今日も雨だった」
「ブルーライト・ヨコハマ」「星影のワルツ」

昭和44年「君は心の妻だから」「港町ブルース」

昭和45年「おんなの朝」「別れても好きな人」

昭和46年「おふくろさん」「知床旅情」「わたしの城下町」

昭和47年「女のみち」「くちなしの花」「恋の町札幌」「瀬戸の花嫁」
「せんせい」

昭和48年「帰ってこいよ」「神田川」「宗右衛門町ブルース」「なみだの操」
「花街の母」

昭和49年「うそ」「十九の春」「二人でお酒を」

昭和50年「北の宿から」「中之島ブルース」「昔の名前で出ています」

昭和51年「大阪ラブソディエー」「酒と泪と男と女」「すきま風」「青春時代」
「歩」「矢切の渡し」「夢追い酒」

昭和52年「北国の春」「秋桜」「津軽海峡・冬景色」「氷雨」

昭和53年「いゝ日旅立ち」「みちずれ」

昭和54年「おもいで酒」「おやじの海」「ふたり酒」

昭和55年「奥飛騨慕情」「昴～すばる」

昭和56年「浪花節だよ人生は」

昭和57年「赤いスイトピー」「北酒場」「兄弟船」「さざんかの宿」「だんな様」

昭和58年「お久しぶりね」

昭和59年「長良川艶歌」「娘よ」

昭和60年「熱き心に」「命くれない」「木曾路の女」

昭和61年「愛燦々」「天城越え」「時の流れに身をまかせ」

昭和62年「北の旅人」「人生いろいろ」「みだれ髪」「雪椿」

昭和63年「酒よ」

平成 元年「川の流れるように」

平成 2年「一円玉の旅がらす」

平成 4年「大阪すずめ」「こゝろ酒」

平成 5年「むらさき雨情」

平成 8年「珍島物語」

平成10年「二輪草」

平成11年「孫」

平成12年「箱根八里の半次郎」

平成13年「大井追っかけ音次郎」「涙（なだ）そうそう」

平成15年「世界に一つだけの花」

平成18年「千の風になって」

誰が何をリクエストしたかで細かなデータを作ろうとしたが、個人情報を出せないとの事で、大まかな年齢・男女の別で調べた結果、年齢・男女の別は関係無く、脳細胞が曲を認識出来るか出来ないかだけの差であり、認識出来る方は好みの新曲まで認識している。

実施十年目の比較

音楽療法への試みをリクエスト方式で高齢者の好みの曲の聞き取りを5年間続け、歌詞により認識出来ることがわかったので、歌詞集を年代別に並べて制作し、全員に配布してリクエストを求めた。

その結果リクエストの多い曲が明治・大正の曲から昭和10年～昭和15年に移行し10年たって昭和30年以降に移り始めている。セラピーの現場では教えないことが原則なので、新曲のリクエストをした人はTVからの情報を自分で学習した事を意味する。

前に述べたように人間のDNAには人間の発明した音楽の受容体は無いので、育つ過程で生活環境からの入力と好みに対応する頭脳の育った人には、同じジャンルの曲には新しい事にも対応することがわかる。

これから10年間にビートルズやフォークの曲が増える可能性も想像出来る。